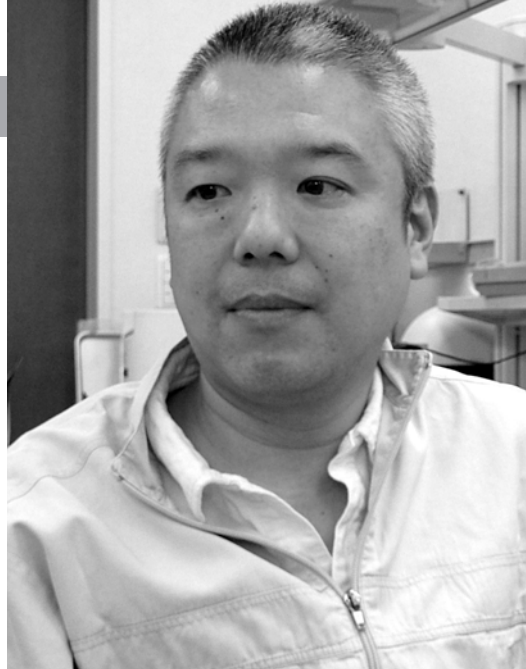


患者さんの笑顔のために 細心の注意と 最大の努力を払う

島田さんは、一人ひとりの患者さんに合った補綴物^{ほてつぶつ}を作るために、最大限の努力を払う歯科技工士です。自分の仕事を歯科医師との共同作業と位置づけ、患者さんのセルフケアや身体状況まで考慮した補綴物を作ることを心がけています。

● 歯科技工士 島田朋拓さん

しまだ・ともひろ ●昭和41年、東京都生まれ。高校卒業後、歯科技工士を養成する専門学校に入学。卒業して歯科技工士国家試験に合格。歯科技工士として、2つの歯科医院に勤務。この間、カナダの歯科技工所で腕を磨く。帰国後、独立して自分の歯科技工所として「バイオテックラボラトリオ デンティストコ (Bio-Tec Laboratório Dentístico)」を開く。主に自費治療の患者を対象に、一人ひとりに合った補綴物を作ることを目指している。



海外でも腕を磨き 歯科技工士として独立

—— 歯科技工士というお仕事に就きたいきさつをお聞かせください。

島田 実は高校生のときはパイロットになりたいがなかったのです。しかし望みがありませんでした。別な職業に就こうという考えでしたが、大学に進んでサラリーマンになるというのは自分には合わないと思っていました。

そんな中で、周囲の勧めもあつて高校の近くにあった歯科技工士を養成する専門学校に入学しました。そこで2年間学び、国家試験を受けて歯科技工士の資格を取りました。その後、2つの歯科医院に勤め、独立しました。

—— 専門学校で学んだことと実際の仕事との間に、ギャップのようなものはありませんでしたか。

島田 学校で学んだことと臨床の場での実際の仕事には、大きな違いがあります。口の中は一人ひとり違い、注意すべきことも千差万別です。一人前の歯科技工士になるには、常にドクターや先輩から学び、腕を磨かなければなりません。学校で学ぶことは基礎の基礎です。歯科技工士として一人前になれるかどうかは、実際の仕事に就いてからどれだけ努力するにかかっています。

—— カナダでも学ばれたということ

とですが。

島田 2つめの歯科医院に勤めていたころから、2年に1回くらいの割合で休暇を利用してカナダの歯科技工所に学びました。その仕事は最先端の技術を取り入れているだけでなく、クオリティも非常に高いものでした。たいへんな衝撃を受けましたね。帰国してからも、疑問点などを国際電話で問い合わせ、多くのことを教えていただきました。

その後、歯科医院を辞めて独立を考えたときも、3カ月ほどお世話になりました。その間はほとんど休みもなく、朝から晩まで必死で仕事をし、歯科技工士としての腕を磨きました。

—— 歯科技工士は、独立して自分の

ラボ^{ラボ}歯科技工所を開きたいと考えている方が、多いようですね。

島田 歯科技工士として仕事をしていると、

次第に自分はこういう方針でやりたいんだという思いが強くなってきます。歯科医院や歯科技工所にはそれぞれのスタイルがあり、そこに勤めていると、どうしてもその範囲でしか仕事ができせん。もっとステップアップしたいとか、さらに幅広いことをやりたいとかと考えると、独立を目指すようになります。私が独立したのは31歳の時です。

—— 歯科技工士のお仕事とは、具体的に

島田 一言で言えば、患者さんに合った補綴物^{ほてつぶつ}を作ることです。一般的な流れを説明しましょう。まずドクターが患者さんの治療をし、型をとります。この型を印象と呼びます。その印象が歯科技工士の元に送られてきます。歯



咬合器に型を装着し、咬み合わせを確認しながら丁寧に作業を進める。島田さんが使う咬合器はグローバルスタンダードで精度が高い。またドイツ製の歯科技工士専用のデスクで作業を進める。

※補綴物：失われた歯の機能を修復するために、人工的に作られた義歯やクラウン、ブリッジなどのこと。

歯科医の指示に基づいて、歯科技工士によって作られる。



顕微鏡を見ながら細心の注意を払い、微細な作業を行う。

科技工士はそこに石膏を流します。これが患者さんの口の中の模型になります。ほとんどの場合、歯科技工士はその石膏模型の上で、最初から最後まで仕事をするようになります。

——お仕事のなかで最も留意しているのは、どんなことでしょうか。

島田 まず納期を守ることですね。絶対に遅れてはいけません。遅れてしまえば、ドクターにも患者さんにも大きなご迷惑をかけ、信用を失ってしまいます。

もう一つは、できるだけ患者さんに負担をかけないように精密な補綴物を作ることです。

まず患者さんに合うか合わないかという問題があります。また補綴物の装着後に患者さんのセルフケアをどうするかも大切です。補綴物をセメントで合着してしまつと、患者さんは歯ブラシと歯間ブラシ、デンタルフロスの3つでしか歯の手入れができません。もし、補綴物の形が悪いと磨き残しが多くなり、歯周病になってしまつ恐れがあります。

2 歯以上で連結した場合の隙間の形、大きさがおかしいと、さまざまサイズの歯間ブラシを使うことになり、患者さんの負担が大きくなります。なかには手の不自由な患者さんもうらっしゃいます。そういう方が歯をケアする場合、右手と左手のいずれを使うのかも考える必要があります。

また当ラボでは金属を使用するときは、メーカー名と成分表、セラミックスの場合は、製造番号とロット番号を記載したカードを患者さんに発行して、補綴物を安心して使っていただくようにしています。

——喜びややりがいは、どんなところにありますか。

島田 何といっても患者

さんが「ピッタリ合った」とおっしゃってくださいたときですね。また特に女性には歯並びの美しさや色合い、つまり審美性を気にされます。それだけに女性の患者さんから「きれい」という声をいただいたときも、うれしくなります。私が作った補綴物を装着したときの患者さんの笑顔が何よりの励みです。

——厳しさや難しさは、どんなところでしょうか。

島田 同じ材質のもので型をとつても、ドクターによつて出来上がりに微妙な違いがあります。ときには、この型の通りに作業を進めても問題はないのだからと、疑問を感じる場合もあります。こうしたドクターが型を取る際の癖のようなものを見極めないと、よい補綴物はできません。1つの補綴物を作るにはたいへんな労力が必要なので、作り直すとなるとたいへんです。それだけにこのような見極めは大切です。

よりよい補綴物を作るのは 歯科医との共同作業

——歯科技工士と歯科医との関係は、どうあるべきでしょうか。

島田 歯科技工士はとても忙しく、ドクターとのコミュニケーションがおろそかになりがちです。しかし、多少時間がかかっても、連絡を取り合ったほうが結局は問題が少なくなります。そういう意味で、私は歯科技工士と歯科

医の共同作業によつて、よい補綴物が作れると考えています。

例えば補綴物をどのような材質にするか、ドクターから相談を受けることがあります。またドクターが取った型に疑問点があれば問い合わせます。私のラボはお付き合ひのある歯科医院とはオンラインで結ばれていますし、型の写真など頻繁にやりとりして疑問点を解消し、よりよい補綴物を作るための努力をしています。また、型取りやできた補綴物を装着するときなどに、立ち会つことも少なくありません。

コミュニケーションが不足し、誤差が重なるとおかしな補綴物ができてしまつ危険があります。そうしたことを防ぐためにも、歯科医と議論できる関係をつくるのが大切ではないでしょうか。

——これから歯科技工士を目指す若者へのアドバイスをお願いします。

島田 歯科技工士の世界は独特で、普通のサラリーマンの仕事の進め方とは大きく違います。むしろ板前さんなど職人さんたちの修業の場に近いかもしれません。ときには先輩やドクターから厳しく叱責されることもあるでしょう。でもそこでくじけず辛抱して技術を磨くことが、自分の成長につながります。

一人前になるためには、日々勉強です。歯科技工士を目指す方は、そのことを心に刻んでほしいと思います。